パリッシュの学習者要因に着目した授業改善ヒント集の開発

――（初年次教育での学ぶ姿勢の育成）――

【発表者】　仲道雅輝・根本淳子（愛媛大学）

１．はじめに

筆者らは，学習者の学ぶ姿勢を育成するために，平成 24 年より調査[1)]を実施してきた。

学ぶ姿勢に着目した研究では，パリッシュの「ID（インストラクショナルデザイン）美学第一原理」から，学習意欲向上につながる学習経験を実現する方策の検討を試みている。

本研究では，パリッシュ[2)]の「学習経験の要因モデル」にある「学習者要因」に焦点をあて，筆者らが携わっている初年次教育の中で，学生が望ましい学習姿勢を身につけ，その後の学習効果が高まることを目指している。また，教員が「学習者要因」に影響を与える教育支援活動を行うことで，学習経験を高めることが可能になることを目指した。授業改善に役立つ「授業改善ヒント集」を作成するとともに，学生が自らの学習姿勢を客観的に評価するための「学習経験自己評価表」の開発を目的としている。本発表では，第一段階として「授業改善ヒント集」の開発に焦点をあてて報告する。

２．パリッシュの学習経験の質モデル

学習経験モデルは，学習経験の質を左右する要因を「学習状況に係わる要因」と「学生個人に係わる要因（以下，学習者要因）」の 2 要因でとらえている。鈴木[3)]によると，学習者要因は次のように説明できる。

(1) 意図（Intent）

個人の学習目的や興味のほか，価値・期待・嗜好・自らが置かれていると思う立場の認識などを含む広範なもの。

(2) プレゼンス（Presence）

心身ともにそこにいることで関与が始まり，他者への共感と積極的貢献によって学びを可能にする。率直な思いや感情を表出し，自分に学ぶ必要があることを認める。

(3) 開放性（Openness）

個人の信念は守りつつも，変化を拒まない気持ち。弱さではなく強さを示すものであり，状況に没頭するには必須の要素となる。

(4) 信頼感（Trust）

良い結果となることを信頼し，困難な状況や直近の報酬がなくても，期待感をもって辛抱強く関与し続けられること。そして，結果が期待通りでなかったとしても，寛容の心をもち，状況が修復できることをも信じること。

３．研究方法

学習経験モデルに関する論文を参照して教員へのインタビュー項目を作成した。次に，初年次教育に長年携わった教員 1 名を対象に，授業実践に関する半構造化インタビューを行った（180 分）。音声データから，逐語録を作成し，意味のまとまりごとに文節で区切り，類似した内容ごとに集め，パリッシュの 4 要因に沿って分けた。分類結果を用いて「授業改善ヒント集」の一次案を作成した。

４．結果および考察

分類の結果，119 項目が抽出された。内訳は意図 31 項目，プレゼンス 30 項目，開放性 27 項目，信頼感 31 項目であった。これらを精読し，以下の観点で精選・除外した。

1) 大学や学部での取組であり，教員個人で工夫できる方策でないもの

例えば,「講座単位で進路面談をする」や「入学直後に講座に所属させ，パソコンと机を割り当てる」は，学部全体の指導体制におよぶ対策であり，教員個々が授業の工夫をするために用いるという本ヒント集のねらいから外れるため除外した。

2) 抽象度が高く、4 要因に直接的に関係しないと判断したもの
例えば「生活面での相談にのる」は，授業改善には直接的に関係せず，全般に関わる内容であったため除外した。

3) 内容が重複するもの
例えば,「学んだことを実際に使う場をつくる」は,「実践の場をつくる」と重複するため除外した。

精選後の項目は 60 項目となった。意図 15 項目，プレゼンス 13 項目，開放性 12 項目，信頼感 20 項目となった。表 1 に抜粋した項目を示した。本ヒント集は，授業を通して学ぶ姿勢を高める方策を見出す手がかりとなり，また，授業が学生の学ぶ姿勢の育成に影響するものになっているかを教員自身で確認することができる。

5．今後の課題

今回の結果をベースとして，異なる対象者への半構造化インタビューから得たデータを追加し，分析を重ねることで，より活用しやすいヒント集に発展させる。また，学生対象の半構造化インタビューを実施し，学生が自身の学ぶ姿勢を評価するための「学習経験自己評価表」の開発を目指す。

謝辞

本研究はJSPS科研費 15K01027の助成を受けたものである。

参考文献

1) 仲道雅輝，鈴木 克明（2012）パリッシュの学習者個人に係わる要因を活用した初年次教育（新入生セミナー）の効果検証，日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集，279-280.

2) Parrish,P.and Wilson,B.G.:“A design and research framework for learning experience”,A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orlando,FL.[Available online] http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08_18.pdf

3) 鈴木克明（2009）学習経験の質を左右する要因についてのモデル,教育システム情報学会,24（4）,74-77.

表1. 授業改善ヒント集第一次案（授業改善策は抜粋）

学習者要因	授業改善策
意図	学生が学びたいことは何かに関心をもつ
	専門分野の学習と関連付ける
	学生が、これまでの学び方や考え方を振り返る機会がある
プレゼンス	他者の学び方や考え方を共有し、意見交換する機会をつくる
	授業を通して友人ができるような工夫をする
	グループ学習では、メンバーに多様性をもたせる
開放性	分からないことは訊くなど、自発的な援助要請を促す
	授業最後にコメントシートを書かせる
	TA等、学生にとって身近な者に経験談を語ってもらう
信頼感	コメントシートにフィードバックする
	学んだことが実社会で活用される場面をイメージしやすくする
	学生を人として尊重した接し方をする